

中国人児童による「てある」構造習得に関する予備的調査 その2

— 「状態」を表す「ている」構造との比較 —

久野 美津子・白畑 知彦

【要旨】

第二言語 (L2) として日本語を学ぶ成人学習者にとって「てある」構造は習得困難な文法項目だと言われている。本稿では中国人児童の15ヵ月間の発話資料を基に、L2児にも「てある」構造は習得困難か、困難ならその要因は何かを、「状態」を表す「ている」構造と比べながら調査した。結果は「てある」構造の方が出現時期も遅く正用率も低かったことから、L2児にも「てある」構造は困難だと考えられる。不適格構造には「てある」と「て(い)る」との混同も観察されたが、特に「てある」を「てる」とする傾向が見られた。この要因として、「自動詞+てる」からの類推や「他動詞+てる」との混同の可能性が考えられる。ある状態を「てる」で表すという傾向は母語の影響とは考え難い。「てる」は「結果状態」を含め広い意味で「状態」を表すことができる客観的描写表現であり、使用頻度も高い。このことから、L2児が「てある」構造でも「てる」を用いて「状態」を表現していたのではないかと推測する。

【キーワード】 第二言語習得、中国人児童の日本語習得、状態表現、「てある」、「ている」

1. はじめに

本稿は、久野・白畑 (2006) の続編として、中国語を母語 (L1) とする児童1名 (L児) の「てある」構造習得を調査した事例研究報告である。「てある」は結果状態 (例: 窓が開けてある、チケットは予約してある) を表すアスペクトの一つである (小川・林1982、寺村1984、益岡1987)。そして、第二言語 (L2) を学ぶ成人学習者にとって習得困難な文法項目であることが知られている (水谷1985、野田他2001、市川2005)⁽¹⁾。「てある」は同じくアスペクトである「ている」との混同 (例:*窓があけている) も報告されており、その一因として「てある」と「ている」が結果状態の用法を持つ点で共通している (例: 窓があけてある、窓があいている) ことなどが指摘されている (市川2005)⁽²⁾。ただし、両者の表す意味は全く同じというわけではなく、意図的行為の結果か否か、あるいは客観的か主観的かなど、いくつかの点で違いがあり (寺村1984、原沢1998、松岡2000、市川2005)、さらに、教師側にとって教えるのが困難な文法項目でもある (白川2002)⁽³⁾。しかし、菅谷 (2003、2004) や橋本 (2006) に代表されるように、これまで「ている」構造の習得研究は数多くされているのに対し、「てある」構造の習得研究はほとんどされていないのが現状である⁽⁴⁾。その理由の1つには、おそらく、自由発話を基にしたデータの中には「てある」構造を用いた発話例が少なく、十分なデータが得られないことが経験上考えられる。

久野・白畑 (2006) では、中国人児童L児の15ヵ月間に得られた発話データから、「てある」構造の出現時期や使用状況を調査した。その結果、「てある」構造の出現が「てい

る」構造の出現に比べて遅い点や、「てある」を「てる」とする不適格構造が多い点などを報告した。また、L児が、状態表現を表すには「てる」（または「ている」）を用いるという学習方略を取っている可能性を示唆した。本稿では、久野・白畑（2006）での調査結果を踏まえ、「てある」構造習得について、結果状態を表す「ている」構造との比較に焦点を当てながら検証し、習得の事実に関する詳しい基礎資料を提供したいと考える。

2. L2先行研究

L2先行研究では、成人学習者には、「てある」と「ている」との混同や（例：*窓があいてある、*窓があけている）、存在動詞「ある」「いる」と「てある」「ている」との混同（例：窓がある、*窓があいてある）などが見られるという（水谷1985、野田他2001、市川2005）。また、松本（2001）は中国人児童1名（観察時の年齢は9歳4ヵ月～12歳1ヵ月）の日本語の作文および発話データから、動詞の形態素の出現時期や使用回数などを調査している。彼女の発話データによれば「ている」が来日10週目に出現し、「てある」が89週目に出現していることから、「てある」の方が出現時期が遅かったことがうかがえる。ただし、「てある」構造習得が研究目的ではないため、詳細は明らかにされていない。

久野・白畑（2006）で明らかとなった点は、以下(1)のとおりである。(1a)～(1c)は「てある」構造習得に関する結果であり、(1d)～(1g)は「てある」構造習得と「ている」構造習得とを比較した結果である。

(1)

- a. 「てある」構造では適格構造（「他動詞+てある」）が7ヵ月目以降毎月観察されるようになった。
- b. 「てある」構造では、不適格構造も7ヵ月目以降断続的に観察され、適格構造と不適格構造とが7～16ヵ月目に混在していた。不適格構造には「*他動詞+てる」「*他動詞+ている」「*他動詞+て」そして「*自動詞+てある」があり、このうち「*他動詞+てる」が最も多く観察された。
- c. 不適格とは断定できないが、「てある」が適切だと思われる場面で「他動詞+てる」を用いた発話が8ヵ月目以降毎月観察された（例：名前書いてる）。
- d. 「てある」構造の出現時期が7ヵ月目であったのに対し、結果状態を表す「ている」構造の出現時期は2ヵ月目であった。
- e. 「てある」構造では相対的に「てある」の発話回数が少なかったのに対し（各月1～11回）、「ている」構造での「てる」（または「ている」）の発話回数は多かった（例えば4～7ヵ月目の場合、それぞれ39回、40回、41回、55回）。
- f. 自動詞と他動詞の対を持つ動詞（閉まる/閉める、つく/つける）では、「ている」構

造での状態表現は早く観察され（「閉まってる」は滞在2ヵ月目に発話、「ついでる」は滞在7ヵ月目に発話）、「てある」構造での状態表現は遅く観察された（「*戸が閉めてる」は滞在11ヵ月目に発話、「*電気がつけてる」は滞在10ヵ月目に発話）。

- g. 「てある」構造で「て（い）る」を用いた表現（例：*電気がつけてる）は比較的多かったのに対し、「ている」構造で「てある」を用いた表現（例：*ついでる）は比較的少なかった。

これらの結果から、L児が状態を表す方法として「てある」ではなく「て（い）る」を用いるという学習方略をとっていた可能性が考えられた。

ただし、久野・白畑（2006）で「てある」構造と比較するために取り上げた「ている」構造は、結果状態（例：窓が開いている）だけでなく、進行（例：雨が降っている）など他の用法も含むものであった。さらに、「ている」構造習得の特徴については、出現時期や不適格な表現を列挙するにとどまっていた。「ている」には様々な用法があるが、寺村（1984）によれば、基本的には、ある動作・現象が終わり、その結果が物理的あるいは心理的に現存する「結果状態」の用法（例：お金が落ちている）と、ある動作・現象が終わらず今存在している「継続」の用法（例：雨が降っている）とがある。そのため、「てある」との関わりを調査するには「結果状態」を表す「ている」の用法を調査する必要があると思われる。そこで、本稿では、それらがいつ頃、どのくらい、どのように使用されているのかを調査し、「てある」と比較することによって、L2成人学習者だけでなく、L2児童にとっても「てある」構造習得が困難であるのか、また、どのような点が困難であるのかを調査したい。

3. 調査

3. 1. データ収集方法

対象としたのは中国人男児（L児）である。10歳3ヵ月の時、両親と中国から来日し、静岡市に住むようになった。来日前の日本語学習歴は全くなかった。1993年8月上旬に来日し、翌9月から市内の小学校へ通い始めた。滞在1ヵ月目にあたる8月は小学校が夏休みだったため、同級生や教師との交流はなかった。母親（中国語母語話者）が日本語に堪能だったため、この時期、家庭内で彼女から日本語での挨拶表現や自己紹介の例などを習っていたようであるが、その他に教科書などから明示的に文法を学ぶことはなかった。

本稿で分析するデータは、L児の滞在2～16ヵ月目の15ヵ月間の発話データである。これは筆者達が原則として1週間に1度、L児の通う小学校を訪問し、約2時間、自由会話を録音し、文字化したものに基づいている。この観察期間はL児の10歳4ヵ月～11歳6ヵ月の年齢の時期に相当する。

3. 2. 分析方法

分析対象としたのは、「てある」「ている」を用いた状態表現である⁶⁾。「てある」の用法は「結果状態」（例：窓があけてある）や「準備の状況」（例：予約してある）などに分類

されることもあるが(小川・林1982)、本稿では便宜上これらを「結果の状態」として扱った。一方、「ている」の基本的用法には「結果状態」と「継続」があるが(寺村1984)、これら2つの基本的用法のうち、本稿では表1のように、「継続」(例:雨が降っている)を除く「結果状態」(「動作の結果状態」「現在の状態」「経験」「属性」など)の用法を「状態」とし、分析対象とした。

表1 分析対象および分析対象外とした用法の例

	分析対象の用法例	分析対象外の用法例
「である」構造	「結果の状態」: 窓があけてある (結果状態) 飛行機は予約してある (準備の状況)	
「ている」構造	「状態」: 窓があいている (動作の結果状態) 車を持っている (現在の状態) 中国へ2回行っている (経験・記録) 空気が澄んでいる (属性) あの兄弟は似ている (性質) 新しい機械をもう使っている (完了)	「継続」: 雨が降っている (動作の継続) 毎朝走っている (習慣) 大学で教えている (所属・職業) 東京に住んでいる (所在)

「が」「を」は口語表現では省略されることがあるため、これらが省略または脱落している場合も分析対象とした。その場合の表記は「(が)」「(を)」と記す。また、状態表現にテ形の活用の誤り(例:*書きてる、*書きてある)があっても、分析対象とした。さらに、「ている」は口語表現では「てる」と発話されることから、「てる」は「ている」の適格表現として扱った。

L児の発話における文法適格性判断基準は、以下の理由により表2のようになる。まず、「である」は原則として「他動詞+である」という形式で状態を表すことから(砂川1998、友松他2000、市川2005)、他動詞(例:あける)を用いた場合、「窓(が/を)あけてある」は適格構造とみなし、「*窓があけて(い)る」は「である」の代わりに「て(い)る」を用いた不適格構造とみなした。ただし、「が」「を」が発話されず、さらに「て(い)る」が用いられ「窓あけて(い)る」と発話された場合には、「窓(が/を)あけてある」を誤った可能性の他に、「窓(を)あけて(い)る」と正しく発話している可能性もあり、正誤判断が困難であるため、「分析困難」として扱った。一方、自動詞(例:あく)を用いた場合には、「窓(が)あいて(い)る」は適格構造、「*窓(が)あいてある」は不適格構造とみなした。

表2 L1児の発話における文法適格性判断基準

	適格	不適格	分析困難
「てある」 構造	例：窓(が/を) <u>あ</u> けてある	例：*窓が <u>あ</u> けて(いる)	例：窓 <u>あ</u> けて(いる)
「ている」 構造	例：窓(が) <u>あ</u> いて(いる)	例：*窓(が) <u>あ</u> いてある *窓(が) <u>あ</u> いた	

3. 3. 中国語での状態表現

「結果状態」を表す「てある」「ている」に相当する中国語の表現には、動詞に「着」「在」などを付加する方法がある(倉石・折敷瀬1983、香坂1986、杉村1994、荒川2003)⁶⁾。このうち、「着」は「事物や人物が～という状態で存在している」ことを表す⁷⁾。「着」と共に使用される動詞は、ある動作によって結果が残る動詞であり、自動詞も他動詞も同じように使うことができる(杉村1994)。(2)は「放(置く)」を用いた例である。また、(3)は「站(立つ)」を用いた例である。

- (2) 椅子上 放着 一个帽子 (椅子の上に帽子が置いてある)
- (3) 門外 站着 一个人 (ドアの外に人が一人立っている)

このように、「着」は「てある」「ている」いずれの表現としても使うことができ、「ている」か「てある」かの区別は中国語ではされていないようである。これらの言語事実から、中国語をL1とする学習者が「てある」を習得する際のL1転移の影響について考えてい⁸⁾。中国語では「てある」「ている」に相当する区別はないため、日本語学習者はこれらを区別して習得する必要が生じる。さらに、中国語「着」を用いて状態を表す場合、前接する動詞は自動詞でも他動詞でもいいことから、(4)のように「自動詞/他動詞+ている/てある」という4通りの表現が可能になると考えられる。

- (4) a. 窓が あいている。
b. *窓が あいてある。
c. *窓が あけている
d. 窓が あけてある。

これらのどの表現も習得の初期段階で出現する可能性があるだろう。つまり「他動詞+てある」の出現時期や使用状況が「ている」を用いた表現の場合と異なっていたとしても、それはL1転移の影響によるとは言い難いと思われる。

4 結果と考察

4. 1. 観察結果

「てある」構造と、「状態」を表す「ている」構造の各発話状況を滞在月数別に記した

ものが表3である。表中の数字は発話回数を表す。紙面の都合上、「てる」「ている」は「てる/ている」とまとめて記し、「分析困難」な発話は記さなかった。「てある」構造、「ている」構造それぞれの各月の発話回数が適格、不適格を含めて5回以上の場合、()内に割合(%)も記した。また、表3を基に、各月の発話の出現状況を示したものが表4である。両構造ともに、各月1回以上発話が観察された場合には記号を記した。■は「てある」「*てある」、□は「て(い)る」「*て(い)る」、△は「*て」「*た」「*る」の出現を表す。

表3 「てある」構造と「ている」構造の発話回数

滞在月数 (年齢)	「てある」構造			「ている」構造				
	適格	不適格		適格	不適格			
	てある	*てる/ *ている	*て	てる/ ている	*てある	*た	*る	*て
2(10;4)	0	0	0	8 (100)	0	0	0	0
3(10;5)	0	0	0	2	0	0	0	0
4(10;6)	0	0	0	20 (100)	0	0	0	0
5(10;7)	0	0	0	17 (100)	0	0	0	0
6(10;8)	0	0	0	19 (100)	0	0	0	0
7(10;9)	3	0	0	14/1 (75)	2 (10)	1 (5)	1 (5)	1 (5)
8(10;10)	5 (100)	0	0	26 (90)	0	2 (7)	0	1 (3)
9(10;11)	2	0	1	32/1 (97)	0	0	0	1 (3)
10(11;0)	9 (82)	2 (18)	0	30/2 (100)	0	0	0	0
11(11;1)	4 (67)	1 (17)	1 (17)	66 (99)	0	0	1 (1)	0
12(11;2)	9 (82)	2 (18)	0	67/1 (96)	3 (4)	0	0	0
13(11;3)	6 (75)	1/1 (25)	0	94/3 (99)	0	1 (1)	0	0
14(11;4)	3	1	0	78/3 (100)	0	0	0	0
15(11;5)	1	0	0	53/3 (100)	0	0	0	0
16(11;6)	11 (92)	1 (8)	0	81/2 (100)	0	0	0	0
合計	53(83)	8/1 (14)	2 (3)	607/16 (98)	5 (1)	4 (1)	2 (0)	3 (0)

表4 「てある」構造と「ている」構造の発話出現状況

構造\滞在月数		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
てある	てある						■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	*てる/ている									□	□	□	□	□		□
	*て								△		△					
ている	てる/ている	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	*てある						■					■				
	*た						△	△					△			
	*る						△				△					
	*て						△	△	△							

4. 1. 1 「てある」構造の観察結果

「てある」を用いた発話は滞在7ヵ月目に初出し、その後毎月観察された。9ヵ月目以降は適格構造だけでなく不適格構造も観察された。不適格なものには「てある」の代わりに「*てる」「*ている」「*て」を用いたものがあったが、「*てる」を用いたものがほとんどだった。同表現で使用された動詞は「書（描）く」「置く」「やる」「張（貼）る」「つける」「閉める」「あける」であり、このうち「書く」は早期から使用され、かつ最も多く（64回中45回）使用されていた。以下(5)は「てある」の正用の発話例である。(5a)は「てある」が出現した滞在7ヵ月目の「書く」を用いた例、(5b) (5c)はそれぞれ「置く」「張る」を用いた例である。また、(6)は不適格な発話例であり、(6a)は「*てる」、(6b)は「*て」、(6c)は「*ている」を用いた例である。例の右端（ ）内は滞在月数を表す。

(5) 「てある」構造での適格な発話例

- a. <観察者:何の話?> 何かね それは中国教科書の中で 書いてあるの話。(7ヵ月目)
- b. <観察者:(消しゴム) 落としたんじゃない?> 落としたんじゃない。筆箱ちゃんと置いてあるで、それで持ってきた。(12ヵ月目)
- c. <雨天のサーカス> テントみたいな張ってあるから 大丈夫なんだ。(16ヵ月目)

(6) 「てある」構造での不適格な発話例

- a. *夜寝るとき お父さんお母さん論文書くでしょ それで電気がつけてるでしょ 明るくから ぼくは自分の部屋の電気しめたけど。(10ヵ月目)
- b. <テントの床> テントの下はね こうなってんのやつある。*そいでその上は ちょっと こういうのシールが貼って。だから寒くない。(11ヵ月目)
- c. *後ろは小さいの部屋があって 部屋の前 あの 灯がつけている。(13ヵ月目)

4. 1. 2 「ている」構造の観察結果

「状態」を表す「ている」構造では、滞在2ヵ月目に「てる」を用いた発話が観察された。その後6ヵ月目までは「てる」のみが観察されたが、7ヵ月目には「ている」も観察された。また、同じく7ヵ月目には「ている」の代わりに「*てある」「*た」「*る」「*て」を用いた不適格構造も観察され始めた。これら不適格構造は13ヵ月目まで断続的に観察されたが、14ヵ月目以降観察されなくなった。「ている」構造で使用された動詞は76種類あったが、不適格構造で使用されたのは「つく」「入る」「似る」「覚える」「持つ」「分かれる」「書く」「残る」であり、「*てある」との混同が見られたのは「つく」「入る」「分かれる」「書く」であった⁹⁾。以下に発話例を記す。(7)は適格構造の例であり、(7a)は「てる」が出現した滞在2ヵ月目の例、(7b)は「ている」が出現した滞在7ヵ月目の例である。(8)は不適格構造の例である。(8a)～(8c)はそれぞれ「ている」の代わりに「*てある」「*た」「*て」を用いた例である。(8d)は「経験・記録」を表す「本(を)書いている」を、「*書いてある」とした例である。

(7) 「ている」構造での適格な発話例

- a. <観察者:(戸は)今閉まってるね。窓は?> 窓あいてる。 (2ヵ月目)
- b. お父さんもお母さんも持っている。 (7ヵ月目)

(8) 「ている」構造での不適格な発話例

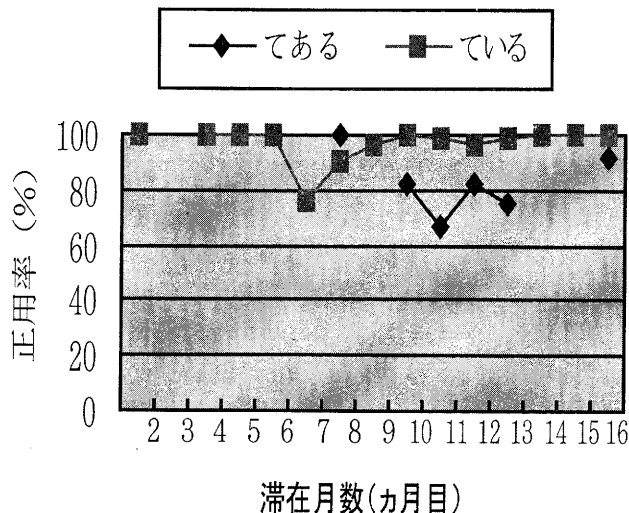
- a. <観察者:(ベルマークが)キャラメルとかについてない?> *いや 僕うちね 時々鉛筆のそういうのついてある ベルマーク。 (7ヵ月目)
- b. <お菓子のおまけカード>*これは チョコレートの中 はいった。 (7ヵ月目)
- c. *武術の場合 普通ときに覚えてけど にほん来たら3こ忘れちゃった。(8ヵ月目)
- d. 高橋由美子?<観察者:ドーナツの宣伝してる人> *漫画かいてある?違うか。
*ランマという本かいてある?<観察者:それは高橋留美子> (12ヵ月目)

4. 1. 3 L児の発話中の「ている」構造と「てある」構造との比較

L児の「ている」構造と「てある」構造の使用状況を比較すると、主に3つの相違点が見られた。1つ目は出現時期の違いである。「ている」構造では「てる」が滞在2ヵ月目に出現したのに対し、「てある」構造で「てある」が出現したのは滞在7ヵ月目であった。両表現は状態を表す点で共通しているにも関わらず、「てある」の出現時期の方が5ヵ月遅かったことになる。

2つ目は正用率の違いである。図1は「ている」構造と「てある」構造について、各月の発話回数が5回以上の場合の正用率(%)を表したものである。「ている」構造の正用率は7ヵ月目は75%だったが、8~13ヵ月目は90~100%、14ヵ月目以降は100%であり、観察期間を通じて高かった。これに対し、「てある」構造の正用率は8ヵ月目は100%だったが、10~13ヵ月目は67~82%であり、「ている」構造に比べ低く推移していた。

図1 「てある」「ている」構造の正用率(%)



3つ目の相違点は、「ている」と「である」との混同の割合の違いである。「ている」を「*である」とした不適格構造（例：*水がはいってある）は全体の約1%（637回中5回）であったのに対し、「である」を「*て（い）る」とした不適格構造（例：*字が書いてる）は全体の約14%（64回中9回）であった。このことから、L児の場合、「である」構造を「*て（い）る」と誤る割合の方が高かったことになる。

このように、「である」構造を、「状態」を表す「ている」構造と比べた結果、「である」は出現時期が遅く、正用率も低く、「*て（い）る」による不適格な表現も多く見られた。したがって、L児にとって「である」構造は「ている」構造よりも習得が困難であると言える。

4.2 「である」構造習得が困難な要因について

まず、L児の「である」構造の出現時期が遅かった要因について考えたい。「ている」と「である」はいずれも状態の用法を持つ点で共通している。しかし、「である」が「結果の状態」のみを表すのに対し、「ている」は3.2節でも述べたが、「動作の結果状態」「性質」「属性」「経験・記録」などの「状態」を表すことができ、日常での使用頻度も高いと思われる。さらに「ている」は状態を単純に描写する客観的表現であるのに対し、「である」は意図的行為によってもたらされた結果の状態を描写する主観的表現である。L児はこれらの違いを明示的に教えられてはおらず、自然な言語習得環境の中では「事実をありのままに述べる」（原沢1998）表現方法である「ている」の方が、比較的容易で身近な表現だったのではないかとと思われる。

次に、「である」構造で不適格な表現が多かった要因を検討するため、同表現で使用されたすべての動詞の発話回数を調べた。結果は表5のとおりである。

表5 「である」構造で用いられた動詞と発話回数

		置く	やる	張/貼る	書/描く	つける	閉める	開ける
適格	である	5	3	1	44	—	—	—
不適格	*てる/ *ている	—	—	—	1	6 1	1	1
	*て	—	—	1	—	—	—	1

主な特徴として、不適格な表現は対（の自動詞）を持つ他動詞「つける」「閉める」「あける」に多く見られた点があげられる。これらの他動詞とそれに対応する自動詞「つく・つける」「閉まる・閉める」「あく・あける」がいつ頃から状態表現として使用されているのかを調べてみたところ、(9)~(11)のように、いずれも自動詞を用いた表現の方が早かった。

(9) 「つく・つける」：ついでる（7ヵ月目）、*つけてる（10ヵ月目）

(10) 「閉まる・閉める」：閉まってる（2ヵ月目）、*閉めてる（11ヵ月目）

- (11) 「あく・あける」 : あいてる (2ヵ月目)、*あけて (9ヵ月目)

これらの発話例では、状態表現はまず「自動詞+てる」(例:電気がついてる)という形式で表され、その後(3~9ヵ月後)、「*他動詞+てる」(例:*電気がつけてる)という形式で表されている。このことから、L児が「自動詞+てる」からの類推により、他動詞の場合にも「てる」を当てはめた結果、「*他動詞+てる」という不適格構造が生じた可能性もあるだろう。

また、別の可能性として、「ている」構造では「他動詞+てる」(例:部屋の電気をつけてる、今までに本を2冊書いてる)という形式で「状態」を表現することもできるため、L児が「てある」構造でも「てる」を用い、その結果、不適格構造が生じたとも考えられる。表6は、不適格構造が多かった動詞「つける」、および、それに対応する自動詞「つく」を用いた、状態表現の発話回数を調べたものである。

表6 「つく」「つける」を用いた状態表現の発話回数

構造	滞在月数	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
ている 構造	「自+てる」 ついてる	1	—	—	3	4	2	1	2	2	3
	「*自+てある」 *ついてある	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	「他+てる」 (を) つけてる	—	—	—	—	1	1	1	3	—	1
てある 構造	「*他+てる」 *(が) つけてる	—	—	—	2	—	2	2	—	—	1

表6のうち、「ている」構造での「他動詞+てる」(例:花をつけてる)は11ヵ月目以降観察された。そして、(12)の発話例のように、「(～を)つけてる」と「*(～が)つけてる」とが同時に観察されることもあった。

- (12) <物語の説明> 針のような物をつけてるでしょ、土の中へ、それでそれを抜かすと船が動ける。あの物何と言うかな? <観察者:いかり>いかり、*いかりがつけてるからと言って、女王様がいかり見せてくれませんかと言って・・・。(13ヵ月目)

このような例は「つける」だけでなく、「書く」の場合にも見られた。(13)は「書いてる」と「書いてある」とが同時に観察された発話例である。前者の「何か本のここに書いてる」は本稿では「分析困難」として扱ったが、「書いてある」と言おうとした可能性も考えられる。そして、このような曖昧な「書いてる」は8ヵ月目以降ほぼ毎月観察されていた。

- (13) <観察者:なんで(日本の漫画だと)分かった?> だって何か本のここに書いてる。にほんの にとって書いて、括弧、そして 鳥山明って書いてある。(9ヵ月目)

これらの発話例からは、「てある」が適切だと思われる場面でも、L児が「他動詞+てる」という形式で状態を表している様子がうかがえる。以上のように、「てある」構造で不適格な表現が観察された要因としては、「ている」構造の「自動詞+てる」（例：電気がついてる）や「他動詞+てる」（例：今までに2冊本を書いてる）からの類推、あるいは混同によるところが大きいと考えられる。そして、L児が「て（い）る」と「てある」のどちらを使うべきか迷ったりした時は、より広い意味で状態を表せる「て（い）る」を選択する傾向があったのではないかと考えられる。

5. まとめ

中国人L児の15ヵ月間の発話資料を基に、「てある」構造の習得について、「状態」を表す「ている」構造と比較しながら調査した。その結果、「てある」構造は「ている」構造に比べ出現時期も遅く、正用率も低かった。また、不適格な表現には、特に「てある」を「*てる」とする傾向が見られた。このことから、L児にとって「ている」構造より「てある」構造の方が習得が困難であると考えられる。

「てある」構造での不適格な表現を分析した結果、対（の自動詞）を持つ他動詞（例：つける・つく）での誤りが多く見られた。さらに、それら他動詞と、それに対応する自動詞について状態表現を調査したところ、自動詞を用いた状態表現（例：ついてる）は早期から出現していたのに対し、他動詞を用いた状態表現（例：電気がついてある、電気をつけている）はそれより遅かった。このことから、「自動詞+てる」（例：電気がついてる）からの類推、あるいは「他動詞+てる」（例：電気をつけてる）との混同により、「てある」構造でも「*他動詞+てる」（例：*電気をつけてる）を用いた可能性も考えられる。自然な言語習得環境の中では、「結果の状態」という限られた用法を表す主観的な「てある」よりも、広い意味で「状態」を表すことのできる客観的な「て（い）る」の方が使用頻度も高いと思われ、L児にとってはより身近で一般的な表現方法であったと思われる。そのため、「結果の状態」を含め、広い範囲で「状態」を表すことのできる「て（い）る」を、「ている」構造だけでなく「てある」構造でも用いていたのではないかと考えられる。

これまでL2先行文献では、成人学習者にとって「てある」は習得困難であり、その一因として自動詞と他動詞との混乱も指摘されてきた。この点では本稿も同様の結果が得られた。ただし、先行研究では述べられていない点も幾つか明らかとなった。それらは、「てある」の出現時期が、「状態」を表す「ている」に比べて遅かった点、「てある」構造に占める「*て（い）る」の割合の方が、「ている」構造に占める「*てある」の割合よりも高かった点などである。また、筆者達の収集した未発表のL1データには「てある」構造での不適格な表現も観察されていることから、L1、L2に関わらず「てある」構造習得には類似した困難な点があるのかもしれない。本稿の事例は1名の発話資料によるものであるため、今後、L1およびL2学習者の事例調査を重ねることによって、「てある」構造習得についてさらに解明していく必要があると思われる。また、「てある」構造での助詞習得についても、今後の調査課題としたい。しかし、15ヵ月間にわたる縦断的調査によって得られた本データは、これまであまり調査されてこなかった「てある」構造習得の解明に、多少なりとも貢献できるものと思われる。

注

- (1) 「である」の用法は「結果の状態」「動作の終わったこと」「放任」「準備」(小川・林1982)や「準備の確認」「動作の結果の発見」(日本語教育学会2005)などに分類されている。
- (2) 当該文脈での不適格な表現には「*」を付した。
- (3) 「ている」に対し「である」は、人が意図的にその出来事を引起した結果だと捉えられている(寺村1984、原沢1998、市川2005)。
- (4) 「ている」習得に関する最近の研究では、例えば到達動詞(例:できる、覚える)と「た」が結びつきやすく(例:できた)、活動動詞(例:やる、遊ぶ)と「ている/ていた」が結びつきやすい(例:やっている)ことなどが報告されている(橋本2006)。ただし、本稿の研究目的は「である」習得の発達過程であるため、「ている」について詳細な発達過程の調査は行っていない。「ている」習得の詳細な調査は今後の課題としたい。
- (5) 過去形(例:あいていた)やテ形(例:あいていて)も含む。否定表現(例:あけてない、あいてない)は分析対象から除いた。
- (6) 「である」を表すには他にも「有」「好」「了」などを動詞に付加する表現方法がある(倉石・折敷瀬1983、香坂1986、杉村1994、荒川2003)。「好」は完了や申し分のない状態になる(する)ことを、「了」は動作や変化の実現・完了を表す(例:那事托付他好了=それは彼に頼んである)。
- (7) 既知の物についてその所在を詳しく述べる場合には「在」を用い、「帽子放在椅子上了(帽子は椅子の上に置いてある)」ようになる(杉村1994、荒川2003)。
- (8) Schwartz & Sprouse (1996)などの唱える、L2習得はL1の最終状態から開始されるとする完全転移モデル(Full Transfer Model)を前提とする。
- (9) 「つく」は林(1985)を基に「(汚れが)付く」「(灯が)点く」「(名前が)つく」などを1種類とみなした。「なる」を用いた表現(例:丸くなる、こうなる)と「する」を用いた表現(例:はっきりする、変な顔する)はそれぞれを1種類とみなした。

参考文献

- (1) 荒川清秀(2003)『一歩進んだ中国語文法』大修館書店
- (2) 原沢伊都夫(1998)「テアル形の意味—テイル形との関係において—」『日本語教育』98号 pp.13-24
- (3) 橋本ゆかり(2006)「日本語を第二言語とする英語母語幼児のテンス・アスペクトの習得プロセス—タ形・テイ形の使用について—」『日本語教育』131号 pp.13-22
- (4) 林巨樹(監)(1985)『現代国語例解辞典』小学館
- (5) 久野美津子・白畑知彦(2006)「中国人児童による『である』構造習得に関する予備的調査」『静岡大学国際交流センター』第1号 pp.9-19
- (6) 市川保子(2005)『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーイーネットワーク
- (7) 香坂順一(1986)『簡約現代中国語辞典』光生館
- (8) 倉石武四郎・折敷瀬興(編)(1983)『岩波日中辞典』岩波書店

- (9) 益岡隆志 (1987) 『命題の文法－日本語文法序説』くろしお出版
- (10) 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版
- (11) 松本恭子 (2001) 「ある中国人児童来日3年間の動詞形態素使用の実態－発話と作文の縦断的調査記録：日本人児童や他の外国人児童との比較－」『日本語教育学会春季大会予稿集』 pp.200-206
- (12) 松岡弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- (13) 水谷信子 (1985) 『日英比較 話し言葉の文法』くろしお出版
- (14) 日本語教育学会 (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店
- (15) 野田尚志・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001) 『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- (16) 小川芳男・林大 (編集) (1982) 『日本語教育事典』大修館書店
- (17) Schwartz, B.D. & Sprouse R. (1996) L2 cognitive states and the Full Transfer/Full Access model. *Second Language Research*, 12, 40-72
- (18) 白川博之 (2002) 「外国人のための実用日本語文法」『月刊言語』 Vol.31 No.4 大修館書店 pp.54-59
- (19) 杉村博文 (1994) 『中国語文法教室』大修館書店
- (20) 菅谷奈津江 (2003) 「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断的研究－『動作の継続』と『結果の状態』のテイルを中心に－」『日本語教育』119号 pp.65-74
- (21) 菅谷奈津恵 (2004) 「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究－L1の役割の検討－」『日本語教育』123号 pp.56-65
- (22) 砂川有里子 (1986) 『日本語文法セルフマスターシリーズ2 する・した・している』くろしお出版
- (23) 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
- (24) 友松悦子・宮本淳・和栗雅子 (1998) 『どんなときどう使う日本語表現文型200』アルク

A preliminary study on the acquisition of the *tearu* structure by a young Chinese child, part 2 : through comparison with the *teiru* structure

HISANO, Mitsuko
SHIRAHATA, Tomohiko

It is known that adult second language (L2) learners have difficulties in learning the *tearu* structure, which represents the state of the result of an action done by somebody. In this paper, we will show results of an investigation as to whether an L2 child learner has also difficulties in learning the *tearu* structure and what kind of difficulties make him confused. We compared the results with

the *teiru* structure which also expresses the state. Our analyses are based on the spoken data obtained from a Chinese child, who had been observed over a period of 15 months.

The results show that the *tearu* structure appeared later than the *teiru* structure, and the percentage of the accuracy of the *tearu* structure was lower than that of the *teiru* structure. It might therefore be concluded that L2 child learner also has difficulties in learning the *tearu* structure. The subject confused *tearu* with *teiru*(/ *teru*). There was a strong tendency to use *teru* in place of *tearu*. This kind of misuse might be caused by the analogy of the correct use of "intransitive verb + *teru*", or by the confusion with "transitive verb + *tearu*". It is difficult to consider that this tendency to use *teru* for expressing "state" is due to the influence of L1. *Teru* can express the state objectively in some meanings, and it is also used frequently. Therefore there is a possibility that the subject used *teru* even in the *tearu* structure.